



障害をもつ幼児の保育(3)

—この子と出会ったとき—

津守

真 (M)

津守

房江 (F)

歩くよるまじい その三 —歩きはじめのドラマから—

十年後の今日、コンサートに招かれて

M 今日にはNさんの歌の会がありました。最初の歌が「里の秋」。そして、手を振って手をたたいて足で踊りながら「静かねえ」と言いました。それを最初聞いた時に私の記憶がいろいろとよみがえり、この子はあこのころ

のことをどう思っているのだろうかと考えました。あつちを向いたりこつちを向いたり、みんなの方をひと回り見えるように向いて、いま歌を歌っている幸せそう得意そうなNさん！ その歩き初めを思わずにはいられませんでした。

Nさんが愛育養護学校に来たのは一九九二年の四月で、いまからちょうど十年前、Nさんが三歳のときでした。歩くことはできたけれども、ふだんはいざり這いで移動していました。歩く訓練をしないと、いまに大きくなって体重も重くなり、もつと歩けなくなるのではないかと心配していました。そのことはしばらく親にも私にも課題でした。たとえそうであっても、歩くことを訓練としてやるのでは、何かほかのところにひずみがあるのではないかと思いました。そんなことを言って、もし歩けなかったらどうするか、質問と疑問に突き当たって、私はずっとそれが頭から離れなかったのです。ある時、もう一生歩かなくともいいのではないか、楽しく過ごせばそれでいいというふうにお母さんと話しました。そうしたら、お母さんが、「私もちょうどそう考えていたところなんです。一生歩けなくとも毎日を楽しんで過ごしていればいい、とそう考えることにします」と言いました。その翌日、誰かがホールに向かってとんとん

歩く足音がしました。私は誰だろうって思っただけでみると、それがNさんで、もうお母さんと一緒にびっくりしました。だけど、その頃にNさんは、まだ来て間もない頃ですが、帰りがけに発作を起こしました。お母さんは「前いたところとはちがって、ここは刺激が多過ぎて、Nさんは静かなところが好きだから、こういううるさい所に来ると発作を起こすんです」と言いました。それで私ははつと気がついて、Nさんという時には静かな所を選んで過ごさないといけないのだと思い、そのような努めました。ある時Nさんが階段をのぼりながら、いーち、にーい、さーん、というふうに数字を言うんです。私は何かそれが非文化的でみすばらしく思えて、同じそうやってリズムを取るならば歌を歌った方がいいと思った。それで、私は歌を歌って階段の昇り降りをしました。そういうふうにして、Nさんが最初に歌った歌が「海はひろい大きいな」という歌です。私はそれを聞いてとたんに思ったことは、ほとんど歩けないような状

態だったNさんの行動範囲は広くはないはずだ。「海はひろいな大きいな」という、そういう歌を歌うのは、自分の歩くことができないう広い範囲の世界がNさんの心の中にあるんだなあと思いました。そんな時から、いち、にい、さん、しい、と唱えるのではなくて、いつも階段の昇り降りの中には、その歌を歌ったんです。それからだんだんに歌の種類が増えていきました。

Nさんはさつき静かな所でないと言作を起こすと申しましたけれども、その反面、みんなの中に賑やかにいることも好きで、来た最初の日から動けない他の女の子をトランポリンに乗せて、担任の先生が跳んでるところにNさんが這い上がってトランポリンと一緒に跳ぶことを楽しみました。だから、私は静かな所が好きだという反面、賑やかな所が好きなんだなあと思っていました。今日の小さなコンサートの中でNさんを中心にして喜んで褒めたり歌を歌ったり、賑やかな場面を本当に楽しんでいました。Nさんが選んだ最初の曲が「里の秋」だと

いうことにも深く感動しました。ずっと以前静かな所で、「里の秋」を歌い始めたことを思い出しました。そのとき「静かねえ。誰もいないねえ」と小さな声で言ったら、Nさんがそれが気に入って、二階に行くと「静かねえ」と言って、「里の秋」を歌い出すというのが二階に行く時の常でした。

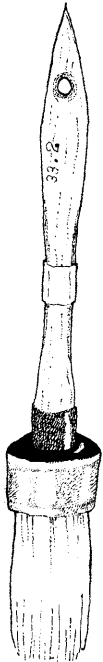
Nさんは確かにホールなどにおいて、賑やか過ぎる時には、よく私の手を引いて、二階に抱っこで行って、私がハーモニカを吹くと、一緒に歌いながら、何度も吹いてくれと要求しました。そんなことがも。う。ず。つ。と。何年も続いていました。そして今日は歌の会で、この学校を卒業したあと、その歌をちゃんと正式に取り上げて形にしてくれる専門家がいるということをととても嬉しく思いました。歌の途中から手を大きく動かしたり、それから座ったり、また立ち上がったたり、そういう動作をたくさんやって、歌だけでなくて体を動かすことをやりました。

歩行訓練を飛び越えて

F 私はNさんについてはあまりかわったことがないけれども、お母さんからよく話を聞いていました。Nさんがたびたび怒るといのが話題になりました。どういふふうになるかという、自分がやりたいと思うことがうまくできない、歩くことをはじめとしてそれができないということがNさんにはとてもつらくて、自分自身を支え切れなくて、頭を床にガンガンぶつけて怒るとか、お母さんの腕を叩いて怒るとか、そういう怒るといことがテーマになっていました。怒らなきゃならないほど、自分の思うような方にも行けないし、動けないしつていうことで大変だったんだなあと思っていたら、今日、歌の発表会では、Nさんは両足でピョンピョン跳んで、歩くどころかピョンピョン跳び上がって踊る。くるくるときれいなワンピースを翻して、ピョンピョンと踊って、両足が空中に浮かぶのはまるで

トランポリンを跳んだような感じに見えるので、あっと思っただけです。この子の場合、歩けないということから、右足、左足を交互に動かして歩くようになるということを通り越して、いきなり踊ること、歌いながら踊るといことに直結したような発達をしたんじゃないかと思いました。着実に訓練を重ねて歩くようになっていよりは、嬉しい歌をいっぱい歌っているうちにピョンピョン跳び上がっちゃって、両足が地面から離れて、そして転ぶと怒って、怒りながらも楽しさに引っぱられて成長するといふ、そういうやり方もあるんだなあって思いました。

M その歩くか歩かないか歩き始めた頃に、自分の足を叩いて、頭をガンガン床にぶつけて、「アシ、アシ」と



言った。それでね、こりゃあ、歩けないというところにあまり注目することのせいだと私は思いました。「歩けなくたって、とにかく歩けないなんて問題じゃないよ、あなたはすてきなものを持っているんだからね」ってそういうつもりで言葉をかけながら、「ちちんぶいぶいぶい。痛い所は病院の屋根の向こうのバスの停留所の向こうのお空の向こうに飛んでけ飛んでけ、ぶーいっ」て言うと、Nさんはくるつと気持ちが変わって、そうして「直った」と言って立ち上がる。それをいつも繰り返ししていた。

F お母さんも『親たちは語る』（ミネルヴァ書房）の中でそのことを書いています。

M あ、そう。

F 「私だつてつらいの、飛んでけ飛んでけ、ぶーいって言つて飛んでつたらどんなにいいだろうって思いますが、お母さんはそう書いてくれました。子どもは歩きたいと思うのに歩けない。そしてそのことであら

だつてるっていうことをお母さんはとつてもつらく感じていたんだと思います。その当時は。

M それは、また同時に、愛されて育っているっていうことと関連があると私は思う。痛い自分の足がもつと何とかならないかと思つても歩けない。それで怒る。だけど「ちちんぶい」つてやると、気持ちの転換ができるというのには、愛されている子どものね、特徴と思うのです。

愛される喜びが機能の喜びへと向かう

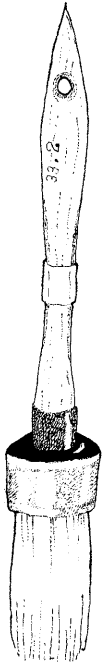
F 歩くことと愛されることは、ちょっとかけ離れているように見えるけれども、かけ離れてはいなくて、転んで歩けなくてつらい思いをした時に、気持ちを立ち直らせる力というのは、愛されることで出来てくるのではないかと思います。五月の日本保育学会大会で発達心理学会理事長の柏木恵子先生と津守真の対談の中で、柏木先生がシャルロッテ・ビューラーの言葉を引いて「機能の

喜び」と言われたけれど、機能の喜びは愛される喜びとくっついてることなんだと思いました。

M それだから、歩けない歩かないという時に、足だけに着目して、それを訓練すれば歩くようになるというふうに考えるのは誤りだと私は思う。

F 歩けないというマイナスの能力を、そこに引き上げれば、マイナスがなくなるんだから普通の人になれるかっていうと、そうじゃないのよ。愛される喜びなしに、機能の訓練だけでは何か偏った人間ができて上がってくるんだと思うの。

M それだからね。歩けない歩かないということもね、生活全体の喜びを与える保育、そして自分でやれることを自分でやる、その喜びを作り上げるといって保育が必要なんだと思う。私は何も機能訓練を否定するわけじゃないんでね、生活全体の中で機能訓練に相当するようなものがちゃんとなされている、既にね。これを更に本音を言うならばね……。



F いいですよ、本音をどんどん言ってください。(笑)

M 私は何回か、機能訓練に立ち会ったことがあるが、それを見ながら、保育の中でこれをやったらほかのことと一緒にできると思った。

子どもがいやがっているのを連れてきて、訓練をやるということを見て私は疑問をもった。ああ、保育がここには必要なんだと思った。今Nさんのことを考えると、一生歩けなくてもいいと思い、親もそう思い、そこまで覚悟したところから、保育というところに腰を据えて本気でともに生きた。今日はNさんの歌の会だったからとくにこうやって取り上げたけれども、何人もこういう人たちがいました。ほとんどの子どもは歩けるようになって

たし、ある子どもは歩くところまでついにはいかなこともある。

M ひとりひとり子どもは違うのであって、比較研究じゃない。

F ひとりの子どもで、あのやり方とこのやり方と比較研究をやってみることはできない。もし違うやり方をやったらどうなるかということは実証することは出来ない。

M 研究者としては辛いところなのだけれども、保育とはそういうものだね。

F 生活全体を盛り上げていくっていう保育がだいじなのね。

親の愛と知恵が輪となって人々に広がった驚き

F 子どもの生活の輪を広げていくことに、親も一所懸命になったし、歌の先生も専門家としてかかわってくれた。子どももそのタレントを持っていた。Nさんのおじ

いさんがあの会のときに、「歌だけでなく、それにもなう所作というか、体の全身の表現がとてもいい」と言っておられた。

M そうそう、それがとても印象的だった。Nさんはウオルフガング・シュタンケの「音と動きのワークシヨップ」(ダンス)にも行っている。

歌が好きという点ではI君も印象的です。私はよくI君と手を叩きながら炭鉱節を歌いましたよ。彼は全身で笑って楽しんだからまわりの人たちが楽しみの輪に巻き込まれた。

F 私の心に残っているのは、I君の階段を降りるときの出来事です。そのときはもう歩いていたらけれど、階段を降りることはうまくできなかった。片足ずつ出せないで、あるとき二階へ行って両足をそろえてピョンピョン、ドスドスンと、ふたつの足をそろえて、ずるっと落ちるような感じで、あの赤いカーペットを敷いた階段を降りてきたのよね。私が心配して付き添おうとした

ら、I君がわざわざ上へ戻って私のことをぐーっと押し
て、ドアのかけに押しつけて、自分でドストドスンって
降りてった。お母さんにその話をしたら、うちではおば
あさんが一階に住んで、二階にこの子の家族が住んでい
たけれど二階から降りる時はすごい音がする。お母さん
は、本人が自分でやらなければ気がすまないと思い、落
ちても仕方がないと思ってね、すぐ飛んで行ける所で
待っていたという話をしてくれました。私はとても感心
しました。それで、降りるということを克服してI君の
空間が広がったと思う。

M 昨日、お母さんと、お父さんと、お姉さんと、それ
からいまI君の家でやっている「ウルトラの国」(音楽
好きのIさんの家族を中心に毎週仲間が集まる場)を手
伝っている福祉の学生さんと、四人がそろって愛育に來
ました。今の話をすると本当にそうですねってお母さん
が言っ、お姉さんもそのことを覚えていました。今は
I君はどんどん遠くまで歩いて探検を重ねています。

大きな音がしたら飛んで行けばいい、階段から落ちた
ら飛んで行こうと思ってはらはらしながら待っていたっ
ていうI君のお母さんの言葉は、知恵と言うか愛と言っ
か、たいせつなこととして心に残っています。

F 親がそういうふうを考えるならばとそれをサポート
してきたのですね。ここに取り上げたNさんやI君だけ
でなく、多くの人が生活を盛り上げ、他の人へも輪を広
げていきます。

M 私が次第に体力の限界を感じて、体を使ってこの子
たちと付き合えなくなつたとき、次々に若い保育者たち
がこの子たちとかかわるようになった。その中でその人
たちの得たものは私とは違う別の豊かなものだと思いま
す。そういう親が増えて、それをしっかりと受け止める
保育者が増えることが障碍を持つ子どもの保育の大切な
ことではないでしょうか。